

## 天狗と迦葉山弥勒寺

迦葉山弥勒寺の守り神である天狗はこの寺の信仰の中心であり、目立つ存在である。獰猛な天狗の像が見守る中峯堂では、この伝説の長い鼻の存在を描いた手描きの面を借りることができる。初めて参拝する際にはこのお面を借りて、自宅の神棚や仏壇に飾り、魔除けとするのが習わしだ。借りた面は翌年、山のふもとで買った新しい面と一緒に返すことになっている。

天狗を守護神とする信仰は、何世紀にもわたって地元の宗教に不可欠な要素であった。現在の群馬県では、天狗信仰は 19 世紀半ばから 20 世紀初頭にかけてこの地域の主要産業であった養蚕と特に強い関係があった。天狗は蚕を守ると信じられており、蚕が疫病等にかからないための魔除けとして農家たちは天狗面を蚕の部屋の壁に飾っていた。

迦葉山弥勒寺の天狗面の貸し借りの伝統も 19 世紀後半に始まったと考えられており、農家の冬の産業として始まった可能性もある。この縁起物と寺の結びつきは、やがて信者たちに、より大きく精巧な面を奉納するようにさせ、1939 年には日本最大級の天狗面が奉納されるに至った。

この巨大な面は丈 6.5 メートル、鼻の長さ 2.8 メートルで、地元の商工会有志が第二次世

界大戦に駆り出された人々の安全を祈願して奉納したものだ。その裏側は寄贈に協力した約 5 万人の信者の祈りと願いが書かれた紙で覆われている。もう一体の面は 1971 年に交通事故防止を祈願して寄贈された。二体並んで、中峯堂に展示されている。日本の年間交通事故死者数は 1970 年の 16,765 人をピークに、交通安全向上のために政府と市民社会が集中的に取り組むようになった。